コスタリカ共和国におけるベースボール型授業導入の試み

宮　﨑　光　次

要約

桜美林大学は、独立行政法人国際協力機構（通称JICA、以下JICAとする）と連携ボランティア派遣事業実施で合意し、2016年から2020年の５年間、毎年１ヶ月間、野球部員をコスタリカ共和国（以下コスタリカとする）に派遣し、野球の普及・振興に貢献することとなった。

2016年に第１回の活動として、野球協会所属選手を対象とした野球教室、小学校を訪問しての野球教室、体育教員養成大学での野球講習会（講義・実技）など、小学生から大人まで延べ1,222名に対して野球指導を行い、成果を上げた。しかしながら、この方法では、野球の普及・振興、特に競技人口の拡大には限界があることが認識された。

そこで、2017年の第２回活動では、コスタリカ人教員を対象に、指導方法に関するセミナーを開催し、学校体育の中にベースボール型授業を導入するという試みを行った。

キーワード：ベースボール型授業、コスタリカ、JICA、指導法、セミナー

Ⅰ．はじめに

１．Sport for Tomorrowと野球指導ボランティア

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定をうけ、日本国政府は、2014年から2020年までの７年間で、開発途上国をはじめとする100以上の国や地域において、1,000万人以上を対象としてスポーツの価値とオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを広げていく取り組みを行っている。この国際貢献事業がSport for Tomorrowである。

桜美林大学は、その一環として、2015年６月９日（火）、JICAと連携ボランティア派遣事業実施で合意し、2016年から2020年の５年間、毎年１ヶ月間、野球部員10～15名程をコスタリカに派遣し、野球の普及・振興に貢献することとなった[1)]。

２．コスタリカと野球

コスタリカは、中央アメリカ南部に位置する共和制国家である。北にニカラグア、南東にパナマと国境を接しており、南は太平洋に、北はカリブ海に面している。

最も盛んなスポーツは国技でもあるサッカーで、FIFAランキング20位（日本44位、2017年５月４日現在）であり、その人気は絶大である。これに対し、野球は競技人口700

～1000人、競技レベルも中米７ヵ国中５～６位であり、マイナースポーツと言える。

このような状況の下、1974年よりJICA青年海外協力隊員（派遣期間は２年、以下、長期隊員とする）が野球指導に関わっており（2000年から2008年の８年間は一時中止）、一部地域では野球文化が強く定着している。しかし、指導者不足は否めず、特に、チームスポーツである野球を普及・振興するためには長期隊員１人の指導では難しく、道半ばと言える。そこで、前述したとおり、本学学生がチームとして派遣され野球指導のボランティア活動を行うこととなった[2)]。

３．本研究の目的

本研究の目的は、第一にJICA桜美林大学連携ボランティア派遣事業締結に向けて2015年に行われた案件形成調査、および、2016年の第１回活動で分かった、コスタリカでの野球の普及・振興に向けての課題を明らかにすることである。第二に、その課題を踏まえ、2017年の第２回活動にて行った、学校体育の中にベースボール型授業を導入するという試みについて報告するとともに、今後の展望を考察することである。

Ⅱ．ベースボール型授業導入の背景

１．2015年の案件形成調査

2015年２月、筆者はコスタリカを訪問、コスタリカ野球連盟、サントドミンゴ野球協会、コスタリカスポーツ省、コスタリカオリンピック／パラリンピック委員会、コスタリカJICA事務所、および、野球を実際に指導している現場を訪れ、野球の現状を見聞した。

この時、長期隊員として派遣されていた加藤直樹氏（現ジャイアンツアカデミー）は、現地の小学校を訪問し、自ら体育授業の中で野球の基礎を教え、競技人口拡大に尽力していた。しかしながら、指導者１名では効果は限定的であると考えられた。

そこで、これまでのJICAの取り組みから考え、長期隊員を支援する形で、学生をチームとしてボランティア派遣できれば、一度に大勢で指導することができ、これまで以上の成果が得られると確信した[3)]。

２．2016年の第１回活動

JICA桜美林大学連携ボランティア派遣事業が締結され、第１回の活動として、2016年２月４日から３月４日の１ヶ月間、教職課程を履修している学生を中心に野球部員９名および筆者がコスタリカに派遣された。この活動の目的は主に以下の３点である。

（１）野球を通じたコスタリカ青少年の健全な育成

（２）コスタリカの野球競技力向上

（３）コスタリカにおける野球競技者の底辺拡大

本学学生は、長期隊員として2015年９月より派遣されていた金子真輝氏をサポートする形で、野球協会に所属する選手を対象とした野球教室、小学校における野球教室、体育教員養成大学での野球講習会、および、コスタリカ代表チームとの試合を通して、小学生から大人まで延べ1,222名に対して野球指導を行い、技術と共に礼儀や感謝の気持ちも持つことなどを伝え、大きな成果を上げた[4)]。

しかしながら、課題もいくつか見つかった。その１つが、子ども達に野球というものを如何に知ってもらうか、理解してもらうか、そして、実施してもらうか、つまり底辺の拡大をどう進めたら良いかということである。

直接、本学学生が小学校を訪れ、子ども達に指導しても一度に50名程度が対象であり、１ヶ月の活動を通しても750名程度に野球とはどんなものかを伝える程度であった。また、一度きりの指導では、野球の魅力、本当の楽しさを伝えることまでは難しいと感じた。さらに、コスタリカの子ども達だけで自発的に野球を実施するというところまでは到底至らず、野球競技人口の大幅な拡大は見込めないことが明らかになった。

具体的な事例としては以下のようなものが上げられる。

（１）言葉の壁

地方都市サンカルロスのセタトレッセ小学校（６年生24名、５年生25名）、ソナフルカ小学校（３年生35名、４年生19名）で体育の授業を利用し野球教室を実施した。また、サントドミンゴ小学校、ラサバナ小学校、サンフランシスコ小学校という首都圏にある小学校でも同様に野球教室を実施し、延べ648名に指導した。

コスタリカの小学校を訪れて分かったことは、体育授業のカリキュラムが日本のようには確立されていないことである。サッカーが国技であり、子ども達もサッカーが大好き。週１回行われる体育の授業でも、ボールを渡し、サッカーをして、身体を動かすこと、楽しくスポーツをすることを目標にしているように見えた。

そこで、野球教室では運動することの楽しさを伝えることを中心課題とし、ゲーム的要素を取り入れたベースボール型授業を行った。

しかし、スペイン語という言葉の壁があり、細かい表現までは出来ず、一定の成果は上げることができたが満足できるものではなかった。そこで、コスタリカ人教員がベースボール型授業を展開できるようにすることが大変重要であると考えた。

（２）指導方法の難しさ

野球の魅力は「捕る、投げる、打つ、走る」など多様な運動経験を含むことや、団体競技として協調性を養うことなどが挙げられる。そういう意味では、学校体育において重要な要素を含んでいると言える。

しかし、その一方で日本においても野球をやったことがない子ども達に野球を教えることは、指導者にとってハードルが高く、授業への導入・実施にあたっては多くの課題があるとされている。しかも、野球が普及していないコスタリカにおいては、更に難しいと言える。そこで指導方法を、分かり易く詳細まで伝え、理解してもらう必要性を感じた。

（3）系統だったカリキュラム、指導用教材の必要性

コスタリカでは、2013年に改訂された学習指導要領で、小学校５年生の指導科目の中に野球とソフトボールの取り組みが紹介され、その効果として連帯感・団結力の強化、建設的な社会との関わり、余暇の有効活用（非行防止）、自己実現などが挙げられている[5)]。

しかしながら、系統だったベースボール型授業の教授法などは示されておらず、長期隊員以外は殆ど指導をしたことがないのが実情である。

そこで、コスタリカナショナル大学（UNA）において、野球指導の講習会を２回実施（講義、実技各１回）、授業においての指導法を伝えた。60名の体育専攻学生が参加し熱心に取り組んでいた。このような体育教員養成課程を持つ大学での試みは、未来の体育教員の養成、体育教育の質的向上、および、野球競技人口の増加に繋がるものと考えられる。

そして、より効果的に、かつ、効率的にこの試みを進めるためには、単元目標および評価、単元計画、具体的な指導内容などを含むカリキュラムが必要であり、それを実際に実施できる指導者向けの指導法の実演が必須であると痛感した。さらには、コスタリカ人教員のみで指導できるよう、指導用教材の作成・配布が重要であると考えた。

（4）用具不足

地方の町ラクルス（ニカラグア国境の町）で少年野球教室を実施、２日間で57名が参加した。近隣のニカラグアは非常に野球が盛んなため、野球に関する知識はあり、興味を持っている子どももたくさんいた。しかし、首都圏に比べ、経済的に劣る地域であるため、野球協会所有のグローブ、バット、ボールなどはあるが、個人の用具を持っている子どもはごく少数であった。

競技人口を増やすためには、このような地方の町にも、積極的に訪れ、野球、スポーツの楽しさを知ってもらえるよう、用具の確保と指導者の育成が必要であることを痛感した。特に、用具の確保は急務で、日本から寄贈する（2016年はファンケル、全日本軟式野球連盟、アシックスからグローブ、ボールなどを寄贈）と共に、既存の道具を大切に使い長持ちさせることや、既成品が入手できないこともあるので、身近にある安価なもので手作りの道具を作成する必要性を感じた。

Ⅲ．ベースボール型授業導入の試み

１．JICA 中南米ベースボール型授業促進セミナー

第２回の活動として、2017年２月７日から３月６日までの１ヶ月間、教職課程を履修している学生を中心に野球部員11名および筆者がコスタリカに派遣されボランティア活動を行った。

2016年の活動中、および、活動後に、現地で長期隊員として活動している金子氏と相談し、第２回活動では新たな試みを行うこととなった。

それは、コスタリカの学校体育の中に、コスタリカ人教員によるベースボール型授業を

表１．セミナー日程表

日付＼時間	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00
13日(月)	ホテル集合	8:00～ 開会式 8:45～ 参加各国の体育・野球の現状について（JICA長期隊員）		基調講演(黒田次郎先生)		昼食休憩	日本における小学校の体育科教育について～ベースボール型の授業の実際～（三田部勇先生）		手作り道具作り方紹介（サントドミンゴ野球協会）
14日(火)	ホテル集合	ベースボール型授業の指導法(講義・実技)（ジャイアンツアカデミー加藤直樹講師）			昼食休憩	ベースボール型授業の指導法（ゲーム）（ジャイアンツアカデミー加藤直樹講師）			
15日(水)	小学校集合	小学校にてベースボール型授業実施（教員・本学学生）				昼食休憩	移動	ベースボール型授業実施後の意見交換・改善点共有	
16日(木)		ホテル集合	今後のアクションプラン発表 セミナー総括		閉会式				

実施場所: ホテル レクチャールーム / グラウンド / 小学校

導入するというものであり、授業の中で、野球の魅力、楽しさを知ってもらい、将来的に野球競技人口を増加させて行こうという試みである。

金子氏は精力的にコスタリカ教育省、野球連盟、JICAと連携を取り、中心的な存在として事業を進め、2017年２月13日から２月16日の４日間、JICA中南米ベースボール型授業促進セミナー（以下、セミナーとする）実施へと漕ぎつけた。参加者は、黒田次郎氏（近畿大学准教授・JICA野球技術顧問）、三田部勇氏（筑波大学准教授・体育科教育分野）、加藤直樹氏（ジャイアンツアカデミーコーチ）、中南米７ヶ国（アルゼンチン、エクアドル、エルサルバドル、コロンビア、ニカラグア、ベリーズ、コスタリカ）の長期隊員、及び、そのカウンターパート、コスタリカ教育省関係者、コスタリカ国内27地域の教育事務所関係者（地域の学校教育に関わる責任者）、野球連盟関係者、コスタリカ人教員、JICA関係者、本学学生11名、筆者である。

セミナー概要は、「日本の体育の在り方」「道具の紹介と作成」「野球指導方法の講義および実技」「小学校におけるベースボール型授業実施」「授業実施後の意見交換と改善点の共有」等であり、表１にセミナー日程表を示す。

２．日本の体育の在り方

セミナー第１日は、三田部筑波大学准教授による講演が行われた。

タイトルは「日本における小学校の体育科教育について～ベースボール型の授業の実際～」であり、冒頭で、日本では全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省が学校教育法等に基づき作成した、各学校で教育課程（カリキュラム）を編成する際の基準となる「学習指導要領」というものがあることを説明された。

その後、具体的なカリキュラム、年間計画、ベースボール型授業の指導案、研修、評価等、以下の項目が紹介された。

（１）小学校体育科の目標
（２）小学校体育科の指導内容
（３）体育における教育的効果
（４）小学校から高等学校までの指導内容
（５）小学校で取り扱う領域
（６）ゲーム・ボール運動領域
（７）小学校体育科の配当時数
（８）年間指導計画の例（第３～６学年）
（９）ベースボール型の授業の実際
（10）国、競技団体から示されている資料
（11）教具・教場の工夫の例
（12）日本の教員研修制度
（13）校内研修
（14）授業研究の例
（15）指導案（授業案）の例
（16）授業観察の視点例
（17）研究成果の発表
（18）自主研究
（19）日本における評価の考え
（20）どのように評価を指導に生かすか？
（21）指導と評価の一体化
（22）小学校で実施されている評価例
（23）部活動について
（24）スポーツ少年団について
（25）外部講師招聘について

３．手作り道具の紹介と作成

三田部准教授の講演に続き、サントドミンゴ野球協会関係者による「手作りバット」「手作りＴ台」の紹介と作成の実演が行われた（写真１）。材料はすべてコスタリカ国内で簡単に入手できるものである。本学学生も参加し、積極的にコスタリカ人教員のサポートを行った。

（１）手作りバット

打撃部分はスポンジ（配管に巻く筒状のスポンジ）を利用した。握る部分は塩ビパイプ（市販されている箒の柄）を使用し、スポンジと塩ビパイプはビニールテープを何重にも巻き固定した。

（２）手作りＴ台

台座部分は大きなサイズのペットボトルを利用、その上にボールを置く部分としてスポ

写真１．手作りバット作成風景

写真２．指導用教本

ンジ（配管を巻く筒状のスポンジ）を乗せ、ビニールテープで固定した。

４．ベースボール型授業の講義および実技指導

セミナー第２日午前は、ジャイアンツアカデミー加藤直樹氏によるベースボール型授業の講義および実技指導が行われた。

日本では「ベースボール型授業」が小学校体育において2011年に必修化された。ジャイアンツアカデミーでは同年から都内の小学校を訪問し、体育の授業としての「ベースボール型」の指導について、教員向けの支援を続けている。その実績から、2015年に日本野球機構（NPB）が制作した指導用教本「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」（写真２左）[6)] の内容編集にも協力し、現在も教員向けのワークショップを開催するなど精力的に「授業」においての野球の普及・振興に取り組んでいる[7)]。今回、この指導用教本をスペイン語に翻訳、「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」（写真２右）[8)] を作成し、テキストとして用いた。

講義の内容は以下の通りである。

（１） ベースボール型授業の「目標および評価」「単元計画案」「具体的な指導内容」。

（２） 中学年（３、４年生）の目標および評価：学年目標、領域目標、学習の道筋、学習内容、学習のねらい、各時間における具体的な教科基準が示された。

（３） 学習内容：「捕る」「投げる」「打つ」に分かれており、学年に応じて難易度が変わる。

（４） 単元計画案：「準備運動・ドリル」「ゲーム」で構成されており、学年毎に難易度が変わる。

続いて、「準備運動・ドリル」についての実技指導が行われた。本学学生がまず実演し、その後、教員が模倣するという形式で行われた。上手に出来ない場合には、個別に本学学生が指導した。内容は以下の通りである。

（１）「捕る（捕球動作）」

　　１）セルフキャッチ　　２）パートナーキャッチ

（２）「投げる（投球動作）」

　　１）パチン体操　　２）トントンスロー

（３）「打つ（打撃動作）」

　　１）ぶんぶん体操　　２）合わせてバッティング

セミナー第２日午後は、グラウンドに場所を移し、「ゲーム」についての実技指導が教員向けに行われた。以下の３種類のゲームが紹介された。

（１） バックホームゲーム（下投げ）

（２） バックホームゲーム（上投げ）

（３） バックホームゲーム（バット）

その後、生徒も参加し、教員が「バックホームゲーム（バット）」を、実際の授業を想

定し行った。本学学生もサポート役として参加し、授業が円滑に進むようフォローした。

５．小学校におけるベースボール型授業の実施

セミナー第３日午前は、教員、教育事務所関係者、本学学生が３人一組となり授業を担当した。

基本的には、教員が前日までのセミナーで学習した内容を生徒に対して実際に行ってみるというものであり、不足がある場合には、本学学生がフォローするという形式で進められた（写真３）。また、本学学生は、安全に授業が進められるよう、実技を実施する場所の確認や道具の整理整頓などに注意を払った。

教育事務所関係者は、授業を見ながら教員の教授法に関する評価を行った。

６．授業実施後の意見交換と改善点の共有

セミナー第３日午後は、午前中に行われたベースボール型授業実施後のミーティングを行い、意見交換及び改善点の共有に努めた。その中で、以下のような意見が上がった。

（１） 授業で使用した道具は柔らかいボールや手作りバット、手作りＴ台であった。これらは容易に入手、作成できたが、学年が上がるにつれレベルも向上し、手作り道具では対応しきれないことがあった。上級学年、レベルの高い子ども達用に、金属バットなど本格的な野球用具の確保や強度の高い手作り道具の作成が必要になる。

（２） 一定程度のルールは理解しているのでベースボール型授業はできるが、本格的な野球の試合を行うまでにはもう少し時間が必要である。

（３） サッカーが国技の国であり、休み時間になると皆サッカーを行っている。そんな中、野球を定着させるためには、地道にベースボール型授業の活動を続けて行く必要がある。

（４） 運動場が狭い（バスケットボールコート１面程度）、体育館やアスファルトのグラウンドしかない小学校もあり、環境を考えて授業方法を考える必要がある。

写真３．コスタリカ人教員による捕球動作の指導

写真４．ドリル（セルフキャッチ）の風景

写真５．バックホームゲーム（バット）の風景

７．小学校におけるベースボール型授業

セミナー終了後、本学学生は約３週間にわたり、各地の小学校を訪問し、ベースボール型授業を実施した。

この授業では、セミナーの際に用いた「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」の単元計画案に基づき、指導案を作成、準備運動・ドリル、バックホームゲーム（バット）、整理体操と展開し、497名の小学生に指導した（写真４、５）。また、教員にも参加してもらい、授業展開を学習してもらった。中には、セミナーの中で学習したことを試すために自ら指導にあたる教員もいたが、多くの教員は見学に留まった。

今後は、教員自らが積極的に指導にあたるようチャレンジして欲しいと思う。また、そうなるよう長期隊員に働き掛けてもらうとともに、2018年の活動でも本学学生がサポートして行きたい。

Ⅳ．まとめ

2015年に行われた案件形成調査、および、2016年の第１回活動を通して、本学学生のスペイン語能力の不足、野球の競技特性から生ずる指導の難しさ、コスタリカには系統だったカリキュラムおよび指導用教材がないこと、野球用具不足という課題が明らかになった。

これらを踏まえ、2017年の第２回活動では、ベースボール型授業促進セミナーを開催し、学校体育の中でコスタリカ人教員がベースボール型授業を展開できるようにするという試みを行った。セミナーには延べ327名ものコスタリカ人教員が参加し、ベースボール型授業導入の種まきは出来た。

しかしながら、１回のみのセミナーでは、ベースボール型授業の定着は難しい。今後も引き続き、小学校を訪問し指導の手伝いをする、再度のセミナーを開催するなど、様々なサポートをして行くことが重要となる。

Ⅴ．おわりに

セミナーの中で、ベースボール型授業を行うために必要な簡単な道具の作成方法について学んだ。また「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」という指導用教本も出来た。これによりベースボール型授業を積極的に取り入れる教員、学校が増えてくれることを期待する。そして、野球というスポーツの認知度が高まり、競技人口の増加に繋がれば良いと考えている。

さらに、学校体育の中に系統だった指導法が存在しないコスタリカにおいて、日本の優れた体育カリキュラム、指導法などが紹介できたことは意義深い。

今回の活動では、コスタリカ人教員のセミナー参加をはじめ、小学生から大人まで合計1,630名にベースボール型授業を体験、学習してもらった。2018年以降も引き続きこの活動を積極的に行い、コスタリカにおける野球の普及・振興、更には体育・スポーツを通して青少年の健全な育成に寄与して行きたいと考える。

参考文献

1）宮﨑光次「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第１報）―コスタリカ共和国における野球指導―」、桜美林論考『自然科学・総合科学研究』、第７号、pp95－112、2016年３月

2）宮﨑光次「スポーツを通じた国際貢献―コスタリカ共和国における野球指導―」、教育旅行研究誌　かわら版、第49号、pp2－３、2016年７月

3）宮﨑、前掲論文、2016年３月

4）宮﨑光次「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第２報）―2016年コスタリカ共和国における野球指導―」、桜美林論考『自然科学・総合科学研究』、第８号、pp37－50、2017年３月

5）加藤直樹「ジャイアンツアカデミーの加藤コーチが「ベースボール型」授業を中南米へ紹介」、http://www.giants.jp/G/gnews/news_3911409.html、2017年２月

6）岡出美則他監修「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」、一般財団法人日本野球機構、2015年

7）加藤、前掲論文、2017年２月

8）Yoshinori Okade、「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」、Nippon Professional Baseball Organization、2016年